

## 藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

声 田 耕 一

六条藤家藤原清輔(一一〇四年〜七七)は歌学者のみならず歌人としても優れていたことは定家『近代秀歌』にいうがごとくである。稿者はかつて清輔の詠歌活動を『古今集』や『万葉集』との関わりで論じたことがある。前者は清輔本『古今集』の本文に拠って詠まれた例歌を挙げて検討したものであるが、これはもとより詠法には焦点をあまりあてずに、清輔本をとりあげた目的を問題にし、当本の優秀さを誇示する意図があると考えておいた。『万葉集』の方は、万葉歌の取り入れ方や制作方法を調べ、著名な歌を十分に理解鑑賞して優美な古語を選び用いること、これらをなだらかな詞の続け柄になるように留意して一首にまとめ上げようとすること、複数の歌を合成して詠作すること、そして内容の面では本歌を意識的にずらして詠むことなどが万葉歌を詠み込む特徴であると結論付けておいた。では、歌の家柄である清輔が祖父顕季や父顕輔の詠歌をどう扱っているのであろうか。果して、父祖詠を抛り所になっているのが散見されるが、この詠作技法が近親者の歌の場合には万葉歌とは違うのか否かなど大いに興味を持つところである。本稿ではここに重点を置いて論を進めていきたい。

なお、清輔の歌は総数で約六〇〇首存するといわれているが、晩年の自撰かと説かれていることを考慮して『清輔集』所収の四四四首をいま対象としておく。

### 一

まず、歌全体の構成や着想が似るものを取り上げていこう。『清輔集』(以下、これを略す)に「月」として入る、  
 127谷河にやどれる月の浮雲は岩間によどむみくさなりけり

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

がある。これに似通う頭輔の歌が見える。『頭輔集』（以下、頭輔詠が『頭輔集』に入る場合はこれを略す）に「人來りて歌よむに、海辺月を」として、

135 すみのえにやどれる月のむらくもはまつのしづえのかけにぞ有りける

とある。ともに「―は―けり」型である。水に「やどれる月」を歌において検するに、そもそもこれらのように「雲」と共に詠む例はなく、単に「やどれる月」を見ての感懐が詠まれるに過ぎないのである。清輔に近い八代集から引くと、

179 われこそはあかしのせとにたびねせめおなじみづにもやどる月かな（金葉集）

290 いけみづにやどれる月はそれながらながむる人のかげぞかはれる（詞花集）

1012 さもこそはかげとどむべき世ならねどあとなき水にやどる月かな（千載集）

最初は題詠（「旅宿月」）、二首目は出家後に池に月が映っているのを眺めての月、三首目は題詠（「水上月」）であり、特に後の二首は無常が詠まれる。実は清輔自身も次のようにうたう。「月三十五首のなかに」として、

153 みな底にやどれる月の影をこそしづめる人はみるべかりけれ

撰政藤原忠通が催行した歌会での詠であり、永暦元年（一一六〇）ころの秋、あるいは翌年七月上旬と考えられている。時に清輔は五十七歳ころである。これも無常感を前面に出している。頭輔とさきの清輔の両詠はこれらとは異なり、その形式からも分かるように一種の見立てが眼目となっている。父が水中の月にかかる叢雲を松の下枝の影とするのに対して、清輔は水中の月にかかる浮雲をもの影ではなくて水中に生える水草そのものとする点で異なっている。「むらくも」に対して「浮雲」としたのは、水草が浮くゆえであることは言うまでもない。父に抛りながらも、単なる模倣には終っていない。

「岩間によどむ」という措辞は『金葉集』恋下の次の歌が念頭にあったものだろう。

458 めづらしやいはまによどむわすれみづいくかをすぎておもひいづらん

離れた男からの便りに対する返事として詠まれたもの。清輔撰『和歌初学抄』「喻来物」に「なかたゆる事には……

ワスレミヅ」と見え、この語が八代集中の唯一例であることから清輔がこの歌を知っていたことは推察できる。

次に、「暮春」として見える、

59 おほかたも春ぞくるはをしきかと花なきやどのの人にとはばや

と似通うものに、顕季の『六条修理大夫集』（以下、顕季詠が『六条修理大夫集』に入る場合はこれを略す）の、「人、はるのころはなによりといふ心をよみ侍りしに」として見える、

41 心見にさてもやはるはうれしきとはなきとしにあふよしもがな

がある。これは清輔撰『和歌一字抄』に「春情有花」で採収されている。特に、三句目以下が酷似する。祖父詠は、花がない年ならば春が嬉しいものか否かを試してみたいから、そういう年があつて欲しいという歌意であり、これは『古今集』恋五の、

750 わがごとく我をおもはむ人もがなさてもやうきと世を心みむ

を思い浮かべているだろう。清輔が焦点をあてているのは春が過ぎ去っていくことであり、これは、たとえば『後拾遺集』春下の、

134 さくらばなまだきなちりそなによりはるをば人のをしむならぬに

のように、散る花ゆえに春を惜しむという趣向が一般的である。愛惜の情を清輔が「花なきやど」の人に尋ねてみたいとしたところが発想の上で目新しい。この「花なきやど」という辞句は祖父詠からヒントを得たのであろう。「はなきとし」はあるはずもないから、春の嬉しさが確かめられないとするように、清輔の場合は「花なきやど」は存在しないという前提に立ち、それゆえ人々が惜春の情を持つかどうかは決定できないとなるのだろう。視点は違っているが、共に春を謳歌した詠と思しい。

次の例を上げよう。「八月十五夜」の、

167 おほかたの秋は半ときくものを月の光はみちにけるかな

これと似るのが、顕季の「九月十三夜、詠月和歌并恋各一首」として見える、

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

307 あきはいまはななばもいまはすぎぬるにさかりと見ゆるよはの月かな

である。顕季は「半ばを過ぎる」という言い回しを好んでいたらしく、「山寒花遅」の歌題で、

317 よしのやまはるはななばにすぎぬれどゆききえやらではなさかぬかも

とあり、『和歌一字抄』に撰入されている。

「あきはいまは」詠に倣ったであろうものに、『為忠家後度百首』「十五夜月」の藤原親隆詠がある。

305 かぞふればあきはななばになりぬれど月はこよひぞみちまさりける

この成立は保延元年（一一三五）であり、顕季は保安四年（一一二三）に没する。清輔が親隆詠を知っていたとしても、顕季詠をまず念頭に置いていたことは間違いない。親隆詠と清輔詠は「月（の光）が満つ」が共通しているが（前者は満月という状態を指しているかも知れない）、これは顕季の歌にも見られる。九月十三夜の月を詠んだという、

142 くれのあき月のすがたはたえねどもひかりはそらにみちにけるかな

である。顕季には見られない、月の光が満つという点を通じることからも清輔はこの歌を脳裏に思い浮かべていたであろう。想像を巡らせば、祖父詠を親隆が拠り所にしたことを誇りに思い、それ故にわざわざこの歌を基にし、さらに父詠を詠み入れたものかも知れない。祖父が「九月十三夜」、清輔が「八月十五夜」という違いはあるが、「半分を過ぎたのに盛りである」と一見相反することを眼目とするのに対して、清輔は「半ばなのに満ちている」と同じように応じており、発想は似る。

次は「雪」の、

200 きのふけふふじの高ねはかきくれてきよ見が関にふれる初雪

である。「富士」と「清見が関」両所を詠み込むのは、たとえば既に『詞花集』恋上に、

213 むねはふじそではきよみがせきなれやけぶりもなみもたためぬひぞなき

と見える。しかし、清輔は句の運びがそっくりな父の歌に拠っている。「歌合し侍りしに、月」とする、

56よもすがらふじのたかねにくもきえてきよ見がせきにすめる月かげ

であり、『詞花集』雑上に頭輔自身撰入している。これは長承三年（一一三四）九月「中宮亮頭輔家歌合」に出詠され、判者基俊は雲は瞬時に消えるので「よもすがら」を用いるのは不適切であり、また富士は雲ではなく煙を詠むべきであるという二つの難から負とした。これに対する頭輔の反論は前者にだけ行われており（『袋草紙』下巻）、後者の難は認めたとしたことなのであろうか。それにもかかわらず、『詞花集』に何ら改変することなく入集させ、清輔も『和歌初学抄』『両所ヲ詠歌』項の「関」に紹介するなど、よほどの自信作であったかと思われる。のちの『古来風林抄』には『詞花集』からの抄出歌として見えている。

頭輔詠は、「清見」に月の清く見えることを掛け、「すめる」を導く体裁をとっている。清輔詠は「清見」に同じ事を響かせる点で父と似ており、そして富士が「かきくれ」るのと対照的に清見関の方は「清く見える」とし、そこで初雪の美しさを強調したのが清輔の工夫であろうと思う。

「恋」として入る、

232としふれどしるしもみえぬわがこひやときはの山の時雨なるらん

を検討しよう。久安六年（仁平二）（一一五〇）（二）ころ成立した『久安百首』の歌であり、のちに『新勅撰集』恋一に入集する。これは、頭輔の「恋」、

29年ふれど人もすさめぬわがこひやくちききそのまのたにのむもれ木

と酷似する。『金葉集』恋上に撰入され、そしてこの歌に拠ったものか、『和歌初学抄』に「近江くちきの袖 クチヌルコトニ」、「すさむ 許容也但人ノ常ノコトグサニハアラズ不許容ヲサムトイフ如何」と見えている。『金葉集』の成立年時（一一二五年）からみて清輔の方が後であろう。実は、これら父子詠に似る歌が存在するのである。『和歌一字抄』（原撰本の成立はほぼ『久安百首』と同じころ）に、関白（藤原忠通）作として見える、

944年ふれど猶ときはなる我が恋や色もかはらぬ住吉の松

がある。忠通は長寛二年（一一六四）没、頭輔は久寿二年（一一五五）没ということから、二人の歌の先後関係は分

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

明でない。両詠は初句と三句目の歌詞が同じであり、二句目に恋の状況を打ち出し、下の句においてこれを比喩でもって説明する体裁をとっている。比喩は共に木であり、「くちきのそま」「住吉」という歌枕を置くところなどよく似る。ただ、進展しない自分の恋と相手に問題にもされない自分の恋と状況は異なっているが、影響関係はあるだろう。閑白作は清輔自ら撰じたものに収められており、いま一方は父詠であり、共に清輔の念頭にあったことは想像できる。内容の面では、二句目が全く発展のない状況であり、下の句がそれに応じるべく変色しないことを詠む点で清輔詠は忠通詠に似通っている。しかし、父の作が『金葉集』に入集すること故にこの歌が詠まれたといま考えて、当歌をここに取り上げておいた。なお、清輔の下の句「ときは山の時雨」は次の歌に想を得たものである。『平忠盛集』に見える、

143ながらへてふるかひもなきわが身こそときはのやまのしぐれなりけれ

忠盛は仁平三年（一一五三）没であり、頭輔主催の歌合に出詠し（谷山本忠盛集）、また『久安百首』の作者にも加えられているので清輔には熟知の人物であった。このように複数の歌によって詠作することは清輔のよくするところであった。

次には、構成という点で今まで上げてきたほどには似ていないものをみよう。「鶯」の、

10鶯のなくこのもとにふる雪は羽かぜに花のちるかぞ見る

これと通うのが、頭輔の、『千載集』春上に「むめの木に雪のふりけるに、うぐひすのなきければ、よめる」として入集する、

17むめがえにふりつむ雪は鶯のはかぜにちるも花かぞ見る

であり、もともと『久安百首』出詠の歌。共に鶯が止まる梅が枝に雪が降り積もっているのが景である。鶯と雪の結びつきは、たとえば『古今集』春上に、

5梅がえにきゐるうぐひすはるかけてなけどもいまだ雪はふりつつ

とあり、けつして珍しくはない。「羽かぜ」に関して、八代集では「鴛鴦」「雁」「水鳥」「鴨」の羽風が多く、「鶯」

は「うぐひすのなくをよめる」とする『古今集』春下だけである。

109 こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてこくらなくらむ

「はかぜ」は、清輔本『古今集』の永治二年本（宮本家本に拠る）と保元二年本（前田家本）は共に「はぶき」とある。清輔本の態度は証本とされる本文に不審を抱いたとしてもその誤まりを正すことなく、かなり忠実に書写されているので、清輔が「羽かぜ」を認めていないとは一概に言えない。古今歌の異伝と考えられるものが『古今和歌六帖』第六の、四三九九番であり、初句は「うぐひすの」、以下は全く同じ。そして、古今歌と同じく、鶯の羽風に梅花が散ることを詠んだものに、『能言集』の、

491 うぐひすのはかぜにはなはちりにけりかきねがくれにほととぎすなけ

がある。清輔はこれらに倣って春の淡雪を鶯の羽風で散る梅花と見紛うとしており、羽風で雪が散ると詠む顕輔とは異なっている。この例歌も着想は似るが、そのまま踏襲しているわけではない。

## 二

ここにおいては、構成は似ていないが、明らかに祖父顕季から影響を受けたと思しい歌を検討してみよう。

「桜」とある、

31 をとめこの袖ふる山をきてみれば花の袂もほころびにけり

上の句は『万葉集』巻四の次の歌に負うているであろう。

504 をとめらがそでふるやまのみづかきのひさしきよよりおもひきわれは

この異伝と思われるものが『万葉集』巻十一（二四一九番）に、初句「をとめらを（が）」として見える。これは、『奥義抄』に初句「をとめがが」、下の句「久しきよより思ひそめてき」と少異をもって上げられており、清輔熟知の歌であった。いま問題にしたいのは下の句であるが、顕季は次の歌を詠んでいる。「春雨」に、

191 かすみしくこのめはるさめふることにはなのたもとはほころびにけり

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

『堀河百首』に出詠され、のちに『新勅撰集』春上に入集する。兩詠の下の句は全く同じと言ってよい。「花の袂」の用例を八代集で検するに、

166 かりにのみ人の見ゆればをみなへし花のたもとぞつゆけかりける（拾遺集）

1024 いかでかくはなのたもとをたちかへてうらなるたまをわすれざりけん（後拾遺集）

53 たづねきてたをるさくらのあさ露に花のたもとのぬれぬ日ぞなき（千載集）

136 夏ごろもはなのたもとにぬぎかへて春のかたみもとまらざりけり（千載集）

とあり、特に『後拾遺集』の例は出家した女に送ったもの。これらは「袂」の華やかさを形容するために「花」が添えられている。これに対して顕季と清輔の兩詠は「花」の方が眼目となっている。祖父詠は「はるさめ」に「張る」を響かせ、花が「ほころぶ」の関係で「たもと」をもって来、「はる」「たもと」「ほころぶ」という縁語仕立ての歌になっている。清輔の歌は二首を合成させる方法で作られたものであり、「袖」「袂」「ほころぶ」が縁語となっており、この点においても当然のことながら顕季作と似る。

ところで、清輔は「花の」を冠する措辞をよく用いる。例を上げてみると、「桜」の、

37 神がきのみむろの山は春きてぞ花のしらゆふかけてみえける  
桜花を白木綿に見立てている。「花のしらゆふ」は既に『散木奇歌集』一〇七番歌に見られ、同じ技法で詠まれる。

「眺望山花」の、

41 み吉野の水わけ山のたかねよりこす白浪や花のゆふばへ

実景の桜花の夕映えを白浪と見立てたものである。この詞句は『散木奇歌集』に、「修理大夫顕季卿六条家にて、桜歌十首人人によませ侍りけるに」とする、

74 せりつみしことをもいはじさかりなる花のゆふばえ見ける身なれば

と見えるが、これは見立ての詠法ではない。

「落花繞砌」の、

45 けさ見れば軒ばとめゆくあま水のながれぞ花のとまりなりける

これは祖父詠に「秋のとまりなるらん」(三三五)「春のとまりなるらん」(三一九)があり、これに従ったのであろうか。前二首とは異なり、見立てとして詠まれてはいない。

最後に「叢夜虫」の、

170 もろごゑに秋の夜すがらなくむしは花のねぐらや露けかるらん

この「花の」は八代集に見られた「花のたもと」と同じように「ねぐら」の形容として用いられている。

このように見てくると、「花の」は清輔の好尚に合ったゆえに「花の袂」を祖父に倣い、同じような意味合いで詠んだのである。

次は「紅葉」とある、

179 をぐら山木木の紅葉のくれなるはみねの嵐のおろすなりけり

を取り上げてみよう。これは撰歌合とされる「永曆元年(一一六〇)七月太皇太后宮大進清輔歌合」に入れられる。顕季詠にこれと似通うものが二首見出される。

99 をぐらやまみねのあらしのふくからに谷のかけはしもみぢしにけり

161 をぐらやまみねのあらしのふくからにとなせのたきぞもみぢしにける

これらの歌題は「落葉埋橋」「於大井河、落葉水紅」とあるので別の折に詠まれたかと思われるが、いずれかが改作であろう。前者は『金葉集』秋、『和歌一字抄』、後者は『和歌一字抄』に採収されている。前者が小倉山の峰吹く嵐で谷の掛け橋が紅葉する景を詠むのに対して、後者は同じ嵐でも紅葉させるのが小倉山ではなく、『八雲御抄』に拠れば「山城 大井川也」とする「となせのたき」である。これらは共に「みねのあらし」が「ふく」とするが、特に後者のように大井川に吹くとするならば、吹き降ろす意の「おろす」を用いた方がよいであろう。

清輔詠は、小倉山の紅葉を詠むことでは前者と同じであるが、「―は―なりけり」型で紅葉する原因を詠む点では異なっている。そして「おろす」を詠み入れている。(峰の)嵐が「降ろす」とする例は少なく、わずかに清輔撰

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

『続詞花集』秋下の、齋院中将作、

270 紅にやしほそめたるもみぢばをおろす嵐のねにかへすかな

と、『堀河百首』出詠で、のちに『千載集』秋下に撰入される肥後作の、

307 みむろやまおろすあらしのさびしきにつまよぶしかの声たぐふなり（千載集）

くらいであり、清輔はこれに従ったものと考えられる。これも清輔詠は祖父に倣いながらも新しさを求めていると言えよう。

「乍随不会恋」とある、

267 水ゆけば川そひ柳打ちなびきもとの心はゆるぎげもなし

をみよう。「川そひ柳」は清輔の少し前から盛んに詠まれる。源俊頼は『堀河百首』において、

120 藻かり舟ほづつしめなは心せよ川ぞひ柳風に波よる

『散木奇歌集』には、

301 五月雨は川そひ柳みがくれてそのたまもとなりにけるかな

と見える。しかし、歌語として共通するだけであり、当歌への影響はないであろう。顕季の歌に、『堀河百首』に出詠され、のちに「荒和祓」として収められる、

215 みなづきのかほぞひやなぎうちなびきなごしのはらへせぬ人ぞなき

が存する。二、三句目は清輔詠と全く同じであるが、祖父詠の実景的な詠法に対して、清輔は川沿い柳が靡くように思ひ人が靡くとする比喩的詠み方をしている点で異なっている。四、五句目について、もっとも似通っているのは、長治元年（一一〇四）五月二十六日催行の「左近権中将俊忠朝臣家歌合」での藤原仲実詠、

24 いかにせんちびきのいしはくたくとも人の心はゆるぎげもなし

であるが、ここには柳は詠み込まれていない。当歌合から『袋草紙』下巻に三首と判詞が取り上げられており（この歌は出ない）、清輔の承知する歌合であった。

「川そひ柳」を詠む歌で言えば、次の二首に影響されているようか。『古今和歌六帖』第六に、

4155 いなむしろかはぞひやなぎみづゆけばおきふしすれどそのねたえせず

と見え、『奥義抄』には四、五句目「なびきおきふしそのねはたえず」とし、「柳のすゑはとかくなれど根はうごかぬを、我身によせてとかくまどへどわがもとはたえじとよめる也」と注が付されている。清輔の「ゆるぎげもなし」がこの五句目に通じる。いま一首は、『頼輔集』の、「同会（注、後白河法皇の供花会）、乍随不逢恋」とする、

72 みづひげばかはぞひやなぎなびけどもそのねはつよきものをこそおもへ

清輔詠と問題であるが、同じ折のものか否か必ずしも明確ではない。<sup>15)</sup> 同一の会で詠まれたとすれば、上の句が似ることから前もって話し合ったか、あるいは作歌する途中で互いに作品を提示し合っていたのであろう。頼輔は下の句で強靱な根を詠み、清輔も同様の旨を別の言い方で表現したのである。なお、これらは清輔の、  
423 なにか思ふながれになびく河柳そのねはつよし朽ちもはてじぞ  
にも影響を与えたと考えられる。

次は以前に取り上げたものであるが、ここに簡略に述べておこう。<sup>16)</sup> 「寒夜千鳥」の、

214 ひさぎおふるあそのかはらの川おろしにたぐふち鳥のさやけさ

である。「ひさぎおふる」「ち鳥」は『万葉集』卷六に見えている。

930 ぬばたまのよのふけゆけばひさぎおふるきよきかはらにちどりしはなく

これに抛り頭季は次のように詠む。『堀河百首』に出詠され、のちに「千鳥」として見える、

242 よくたちになちどりしはなくひさぎおふるきよきかはらにかぜやふくらん

清輔はこの歌によって万葉歌を知ったとも考えられようか。祖父が万葉歌と同じように千鳥が鳴く原因を詠むのに対して、清輔詠は川風に伴って聞こえてくる千鳥の声の「さやけさ」が眼目になっている。なお、清輔の五句目は書  
陵部蔵『柿本集』（五〇一・四七）の、

114 この比のあきのあさけのきりかくれ妻よふしかのこゑのさやけさ

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

に負うているだろう。

次に、いままでとは趣の異なる例歌を上げて検討してみよう。「神祇」の、  
353 はふりががさす玉ぐしのねぎごとにもだるるかみもあらじとぞ思ふ

であるが、清輔にこう詠ましめたのは、祖父の「いのれどあはぬ恋」とする、

145 はふりががいのりを神やうけざらんわがにしきぎをとる人もなき

に拠るからではなからうか。共通する語は「はふりが」「かみ」くらいしかない。顕季は、「錦木」の故事を踏まえて、祝子の祈りを無視して神は恋しい女が気に入るように計らってくれなかったという恨みを詠む。清輔は、祝子の願掛けに対して神は思い悩むこともなく、願ひ事を叶えるだろうとする。つまり、これらは相反する内容を詠んでいるのであり、影響関係を想定してもよいのではなからうか。

実は、これに類することが清輔の歌には多く見出される。たとえば、「萩花勝春花」の、

107 小萩原やなぎさくらをこきませし春の錦もしかじとぞおもふ

は言うまでもなく『古今集』春上に見える、

56 みわたせば柳桜をこきませて宮こぞ春の錦なりける

を意識している。また、「若菜」の、

16 しろたへの袖ふりはへて春の野のわかなは雪もつむにぞ有りける

は『古今集』春上、貫之作の、

22 かすがののわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

を踏まえている。古今歌が若菜を摘みに人々が行くと詠むのに対して、清輔は雪が積もっているので人だけでなく雪

も若菜を摘むと作ったのである。これは、『後拾遺集』春上の、

32 ひとはみななのべのこまつをひきにゆくけさのわかなはゆきやつむらんに

に拠り所があるのだろう。そして、「題不知」詠である、

120 思ふことのこらぬ物は鹿のねを聞きあかしつるね覚なりけり  
は同じく『古今集』秋上の次の歌を念頭においている。

214 山里は秋こそことにわびしけれしかのなくねにめをさましつ

古今歌は山里に限定してその淋しさを鹿の音で象徴しているのに対して、清輔は寝覚めして鹿の音を聞き明かしたことの満足感を詠んでおり、おおよそ対照的である。次のような例もある。「秋はな」の、

113 うすぎりのまがきの花のあさじめり秋は夕とたれかいひけん

の下の句は、たとえば『枕草子』に代表される「秋は夕暮」などを通念とするのに対する反発であろう。「はふりこが」詠はこれらと同じ様相であると考えてもよいのではないか。

### 三

次に、父顯輔の歌を脳裏に思い浮かべている例を上げてみよう。「山家早春」の、

4 をの山の春のしるしは炭がまの煙よりこそ霞みそめけれ

であるが、「炭がま」と「をの山」の取り合わせについては、『和歌初学抄』に「炭がま 大原山 ヲノ山 カサトリ山」とあり、歌に詠み込まれるのは『堀河百首』からである。たとえば、源師時詠、のちに『金葉集』冬に入集する、

1081 すみがまにたつけぶりさへをの山は雪げの雲とみゆるなりけり

や源師頼詠に、

1076 おほ原やをののすみがま雪ふりて心ぼそげに立つけぶりかな

とある。そして顯季も、

1077 炭がまやそこともみえずふる雪に道たえぬらんをのの里人

と詠んでおり、家集に入る。これらはいずれも「炭竈」題に収められており、「冬」の一歌題である。清輔は「かすみ」を詠んでおり、春の景となっている。実は清輔詠にこれと同じ趣のものが「炭竈」として、

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

216 炭がまのけぶりにかすむをの山は年にしられぬ春やたつらん

とあり、『久安百首』出詠歌、春に詠まれる。清輔が次の頭輔詠を襲ったことは確実であろう。「霞」に、

74 すみがまのけぶりにむせぶをの山はみねのかすみもおもなれにけり

とあり、清輔両詠と同じ「をの山」「すみがま」「けぶり」「かすみ」が見えており、特に「炭がまの」詠と上の句は酷似する。父が擬人化してユーモラスにうたい上げているのに対して、清輔は「年にしられぬ春」と、同じように擬人的に詠出している。この措辞は『拾遺集』春、貫之作の、

64 さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬゆきぞふりける

に範をとったとされているが、あるいは『詞花集』雑上の、

273 すまのうらにやくしほがまのけぶりこそはるにしられぬかすみなりけれ

と、「けぶり」「かすみ」が共通することもあり、この「はるにしられぬ」に倣ったかとも考えられる。いずれにしても、これは二首の歌を合成して詠作されたのである。

次は、「鶯」に見える、

14 谷のとかへりやしぬる鶯の花のねぐらはちりつもりつつ

であるが、「花のねぐら」は既述したように清輔の好む表現であった。「花のねぐら」が鶯とうたい合わされるのは、古くは寛和二年（九八六）六月十四日内裏歌合の、

4 うぐひすのなくねのどかにきこゆなり花のねぐらもうごかざるべし

であり、これは『袋草紙』の流布本に欠落する巻末部分に見られ（陽明文庫蔵本）、これには最後が「ざるらし」とある。これ以降、頭輔まで詠まれることがないようである。すなわち「鶯」に、

73 うぐひすのはなのねぐらにとまらずは夜ぶかきこゑをいかできかまし

と見える。「花のねぐら」は共に罅が咲いている梅の木であることをこゝう表現したものであろう。清輔詠について、「国歌大系」本は「ちり」に「塵」を当てている。父が鶯の声を詠むのに対して清輔詠は視覚をもって作られた歌と

なっている。歌合の歌も声を対象にしており、また清輔没の翌年に右大臣九条兼実が催した百首歌<sup>(9)</sup>においても、俊恵の『林葉和歌集』に「右大臣家百首内、鶯五首」とする、

58 いくほども住みはつまじき宿とてや花のねぐらに鶯のなく

61 枝ごとにうつろひ鳴くはうぐひすの花のねぐらや住みうかるらん

があり、これらが一般的であったと思う。このように、清輔は先例にも従うことなく、独自の詠み方をしていることが分かる。

最後に、「郭公」に見える歌を検討しよう。

67 郭公よこ雲わたる山のはにさもほのめきて過ぎぬなるかな

「よこ雲」は比較的新しく用いられた歌語であり、大江匡房作（一〇四一年〜一一一一）で、『和歌一字抄』に、180 山桜わきぞかねつるみよしののよこ雲渡る春の明ぼの

と詠まれるのが初出である。次に永久四年（一一一六）成立の『永久百首』「春曙」に、

26 山のはのよこ雲ばかりわたりつつみどりにみゆるあけぼのの空

があり、これらが「よこ雲わたる」とするのは清輔詠と同じ。しかし、共に春の景を詠むことでは清輔とは異なる。次いで見える、清輔と同じ郭公が詠まれる顕輔の歌に酷似するものがある。「暁月聞郭公」の、

9 月かけにたづねきたればほとぎすなくやまのはによこぐもわたる

この三句目以下の句順を変えて清輔は上の句に使用したのであろう。内容的には、顕輔詠は横雲の方にいわば主眼があるが、清輔の方は横雲は添え物にすぎず、あくまでも郭公を詠む。郭公を正面に据えることが一般的であることからみれば、新しい観点の顕輔に対して清輔は旧来の詠み方と言えようか。「ほのめく」は八代集に限れば五例見出せるが、このうち郭公に詠まれるのは次の二首であり、両者のつながりはけっして一般的なものではなく、清輔は特に前者に従ったのであろう。

118 ほととぎすほのめくこゑをいづかたとききまどはしつあけぼののそら（金葉集）

藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐる

167 心をぞつくしはてつるほととぎすほのめくよひの村雨のそら（千載集）

四

最後に、清輔が祖父、父と受け継がれてきたものを詠作した例を上げてみよう。まず「柳」の、  
29 わぎも子がすそ野になびく玉柳うちたれがみ心の心ちこそすれ

であるが、二句目「すそ野」は古くから詠まれる歌語ではない。確実な例としては、『後拾遺集』秋下に一例、そして顕季詠に、「兵衛督の家歌合、夏風」とあり、のちに『金葉集』夏、『袋草紙』下巻に見られる、

301 なつごろもすそののくさばふくかぜにおもひもあへずしかやなくらん

の二首だけである。これを承けた清輔詠に、『久安百首』に出詠され、のちに「鹿」として収められる、  
118 たかさごのをのへの風やさむからんすそのの原に鹿ぞなくなる

がある。裾野を吹く夏の涼しい風で鹿が秋の到来を待望する祖父詠に対して、清輔は風の寒さを鹿が悲しむとしており、例のように異なった詠み方である。では、「わぎも子が」詠はどうなのであるか。「わぎも子が」は「すそ」にかかる枕詞となっており、これが倣ったかと思われるもの一つに『久安百首』出詠の顕季作がある。

342 わぎも子がすそ野に匂ふふぢばかま露はむすべどほころびにけり

のちに『新勅撰集』秋上に撰入される。そして同じ顕季詠が「蘭」に、  
47 わぎも子がすそのにほふふぢばかまおもひそめてし心たがふな

と見え、両詠は上の句が全く一緒であるが、後者は上の句が序詞となっている。これらは顕季の次の歌に負うているのである。「早苗」に、

206 わぎもこがすそわのたるにひきつれてたごてまなくとるさなへかな

とあるが、「すその」ではなく「すそわ」とする。このことは『万葉集』巻九の、  
1762 つくはねのすそわのたるにあきたかるいもがりやらむもみちたをらな

に拠っているからであろう。顕季は「わぎもこが」を「すそ」にかかる枕詞として用いたのであるが（これは顕季に始まったと思われる）、顕輔は顕季「なつごころも」詠にある「すその」を使ってこれを襲ったものであろう。なお、清輔詠の三、四句目は『堀河百首』の大江山房作、

114 さほひめのうちたれがみの玉柳ただ春風のけづるなりけり

の二、三句目を念頭においている。「わぎもこ」の関係で「うちたれがみ」は相応しいとして用いたのであろう。

次は「留信失恋」として見える、

271 中にかくれのを野のをみなへし露のかたみをなになに置きけん

である。「かくれのを野」という歌枕は次の顕季詠が初出であろう。『堀河百首』に出詠し、のち「女郎花」として収められる。

219 あきぎりにかくれのをのをみなへしわがたもとはにはほへとぞおもふ

「かくれ」に「隠れ」を掛けるのが眼目である。顕輔は「萩」として、

99 人も見ぬかくれのをのにさくはぎはこれこそよるのにしきなりけれ

と詠んでおり、女郎花に代わって「萩」とする。これは、「かくれのをの」ではないが、『万葉集』巻八の、

154 よひにあひてあさかほはづるかくれののはぎはちりにきもみちはやつげ

が脳裏にあったからではないか。顕輔詠も顕季を承けて「隠れ」を掛ける。清輔詠も二、三句目は顕季と同じように「隠れ」を掛けているだろうが、序詞として機能させている点では異なる。そして「をみなへし」に女を響かせている。これは、姿を消した女がほんのわずかの文を残したことをかえって恨んでいる男の歌という体裁をとっているだろう。なお、四句目は『拾遺集』雑上の、

499 ゆくすゑの忍草にも有りやとてつゆのかたみもおかんとぞ思ふ

に拠っているかと思われる。

以上、清輔が父祖詠からいかに影響をうけたかをみてきたのであるが、他に一句だけ共通するものがあり、これは省略に従っておいた。この稿においても、清輔は複数の歌を合成して作歌すること、構成や着想は似るが、単なる模倣に終ることなく工夫を凝らしており、いわば清輔らしさを際立たせようとしていることを窺い知ることができると思う。そもそも清輔はいわゆる本歌取りに興味があり、歌学書の中でも最も早い著述（一一三五年〜四四）で、時に清輔三十二〜四十一歳ころの『奥義抄』にも、ことに「盗古歌証歌」項を設けており、数多くの例を上げている。その冒頭に、

ふるき歌のこころはよままじきことなれ共、よくよみつればみなもちゐらる。名をえたらむ人はあながちの名歌にあらずは、よみだにましてば憚るまじきなり。又なからをとりてよめる歌もあり。それは猶こころえぬこと也。

との立言がある。一般的には古歌と同じ内容の歌は詠むべきではないが、上手に詠めば良い。著名な人は、特別な秀歌ではない古歌を本歌より上手に詠めば差し支えない。しかし、半分を古歌を取り用いて詠む歌があるが、これはやはり納得できない、というような意であろう。清輔は基本的には本歌取りを積極的に認めていると考えられる。このうち、「又なから……」の部分については、特に「以下歌已取半」として具体例が上げられている。たとえば、『万葉集』巻十一の（以下、『奥義抄』に見える歌は『奥義抄』本文に拠る）、

2436 ことにいでていはゞゆゝしみ山川のたぎつこころをせきぞかねつる  
と下の句が共通する『古今集』恋一の、

491 あしびきの山した水のがぐれてたぎつ心をせきぞかねつる

が並べられている。これに類するものが前出の清輔詠にあり、一四、三一、二六七、二七一番歌は二句にわたって本歌と同じである。三一番歌は下の句全体が通じており、この例歌とほぼ同じ。他は五七音の二句が共通であるが、これらは「取半」に該当しないのであろうか。既述したように、これらはおおよそ観点や詠法が違っており、序詞として用いていることなどにおいて父祖詠とは異なる。『奥義抄』の同じ箇所上げる、『万葉集』巻十一の、

2727 たか山のいはもとたぎりゆく水の音にはたてじこひはしぬとも

と『古今集』恋一の、

492よしの川いはきりとほし行く水の音にはたてじ恋ひはしぬとも

の關係と比べてみれば（これらの方が共通する句数は多いが）、その違いは瞭然である。たとえ多くを他の歌に拠ったとしても、工夫を凝らして新たに歌を作り上げたということなのであろう。

ところで、清輔は理想的な「盗古歌」歌としてどういうものを考えているのだろうか。これは『奥義抄』の先述の立言のあとに列挙されている歌に見出されるであろう。たとえば『拾遺集』秋の、

202河ぎりのふもとをこめて立ちぬればそらにぞ秋の山はみえける

と『統詞花集』秋下の、

251麓をば宇治の河霧立ちこめて雲るにみゆる朝日山かな

が見られる。後者は『袋草紙』雑談部に紹介され、公実が本歌取りを自讃した逸話として伝わっており、のちに『新古今集』秋下に撰入される。麓の川霧に山が浮かんで見えるという本歌を承けて、朝日山に代表させて宇治の情趣を巧みに詠み上げていることを清輔も称賛したのであろう。あと一例を見ると、『後撰集』春中の、

60かへるかり雲井にまどふこゑすなりかすみふきとけこのめはる風

と『金葉集』夏、

126ほとゝぎすくもちにまどふ声すなりをやみだにせよ五月雨のそら

がある。これについて、渡部泰明氏は『金葉集』歌が題詠（雨中霍公鳥）の歌であり、これを作者源経信が上手に詠みこなしたことを注視させるために清輔は上げたとしている。そして確かに「主題や季節を変えた転換の仕方が巧み」な歌である。

父祖詠を脳裏に思い浮かべて作られた自詠はこれらと同じような手際で作られたものであると清輔は言いたいのではなからうか。

さらに、清輔の抛り所とした歌が『金葉集』『詞花集』に入集し、清輔自撰の『和歌一字抄』『和歌初学抄』に採収  
藤原清輔詠歌の父祖詠の受容をめぐって

されることからみれば（清輔没後の『千載集』『古来風躰抄』に採られるものもある）、清輔の営為は父祖を顕彰するねらいがあったとも考えられる。

注(1)「藤原清輔詠と清輔本『古今集』」（島大國文）第二十一号）

(2)「藤原清輔の詠歌―特に、万葉歌の受容について―」（本誌、第二十二号）

(3)松野陽一氏「平安末期散佚歌会考(1)―法性寺忠通家月三十五首会―」（和歌史研究会会報）六十号）

(4)鳥井千佳子氏「清輔本古今集の性格」（和歌文学研究）第四十九号）

(5)久保田淳氏「新古今歌人の研究」第二篇第二章、拙稿「藤原清輔の「公通家十首会」への参加をめぐって」（和歌文学研究）第六十四号）、村上さやか氏「崇徳院句題百首考」（和歌文学研究）第六十七号）

(6)注(2)に同じ。

(7)『私家集大成 中古I』に拠る。

(8)加藤睦氏「藤原清輔の『久安百首』について」（東京水産大学論集）第24号）

(9)松野陽一氏「藤原俊成の研究」第一篇第一章第二節

(10)安田純生氏「藤原顕輔の和歌―『久安百首』の作品について―」（講座平安文学論究）第三輯）

(11)「藤原清輔の「本歌取り」意識―『奥義抄』『盗古歌証歌』をめぐって―」（国語と国文学）平七年五月号）

本稿の引用は、和歌は特に断つたものを除いて『新編国歌大観』に拠った。ただし、『金葉集』は二度本を用い、『万葉集』は西本願寺本の訓みに従った。歌学書については『日本歌学大系』を用いた。